

Clark, F., Wood, W., and Larson, E.A. (1998).
Occupational Science: Occupational Therapy's Legacy for the 21st
Century (作業科学:作業療法から21世紀への贈り物)
In H. Hopkins & Smith (Eds.), *Willard Spackman's Occupational*
***Therapy* (pp.13-21). Philadelphia: Lippincott**
著者と出版社の承諾のもと翻訳を掲載する。
翻訳:小田原悦子

作業科学のルーツは作業療法にある
1900年代初頭における革新的な社会運動の集結
作業療法から作業科学への贈り物
最近の研究、作業の形態、機能、意味
作業の形態
作業の機能
作業の意味
結論

作業科学は20世紀初めの価値と作業療法実践家の信念から生まれ、来るべき世紀には作業療法の専門職に貢献することを約束している(南カリフォルニア大学、1989)。作業科学と作業療法はどちらも作業に焦点を合わせているが、作業療法は専門職であり、作業科学は学問分野であるという違いがある。専門職とは賃金を支払われる職業の一形態であり、その他の専門職とは区別され、その公共へのサービスは学校で教育された専門知識の基礎と技術を応用して行われる(Freidson, 1994)。一方、学問とは、「大学のコミュニティーによって学問的探求として適切であると認められた知識学問の一分野」である(南カリフォルニア大学1898、p. 143)。

学問領域として、作業科学は、作業の形態・機能・意味の研究に焦点を置いている。Elizabeth June Yerxaが創立し、作業的存在としての人間の研究、つまり、人が作業を通していかに意味を確認するかを中心に研究すると述べられている(Yerxa, et al., 1990; Clark et al., 1991)。文化人類学者が活動 (activity)の範囲、流れと呼ぶもの、つまり現存する人々にとって日々を満たす範囲の活動について述べている(White, 1991)。作業科学では、作業とは文化の語彙で名付けられ時間の流れを満たす日常の活動であると定義している(Yerxa et al., 1990; Clark et al, 1991)。作業科学は単一の理論、モデル、参照枠ではない。むしろ、文化人類学、社会学、心理学などの学問形態と同じ社会科学である(Yerxa et al., 1990)。そのデータ収集法は組織的、一貫した、一般の吟味に耐えるので、(人文科学より、)科学に分類される(Carlson & Clark, 1991)。Carlson & Clark

は、科学を「学者集団の経験に基づき、しかも系統だって(ルールに従って)行われる人間についての研究として」定義している(p. 236)．作業科学は対象として人間の行動を扱うので、自然科学よりむしろ社会科学よりに位置すると考えられる(Homans, 1967)．

作業科学は、実践家が特に有効だと思うその他の理論、モデル、参照枠のほかに、実践に応用できそうな作業についての多くの理論を生み出すだろう．しかし、最初のユニークな貢献は、作業の概念に明確に焦点を合わせた知識の集積を、実践家に提供することだろう．人間の作業の複雑さと力について、もっと明確で広い意味を実践家に与えることによって、専門職が統合され、一般の人々へ質の高いサービスを提供できるでしょう．

この章では、作業についての中心概念と、20世紀初頭に起こった作業療法の根本にあった価値にはっきり焦点を合わせることから始めよう．結果的には、これらの信念が作業科学に人道的概念的基礎を与えるように務めた．そして、作業科学は作業の形態・機能・意味についての学問として述べられる．その他の部分で、これらの側面を作業科学者がどのように研究しているかを述べよう．

▼The Roots of Occupational Science in Occupational Therapy 作業科学のルーツは作業療法にある

Harold Bell Wrightは「作業は人生、生活の糧である」と書いた(Dunton, 1915, p. 6. より引用)．その約100年後、1995年にRobert Bingは次のように述べている．「(歴史家たちは)各世紀末の十年間には、前世紀の課題を果たし新世紀に備えるために、何か取り分け特別で並外れたエネルギーのうねりがおこることに気づいている．90年代の出来事は過去と将来の両者に焦点を当てている．」(p. 4)

「作業は人生、生活の糧である」というのは、100年前に言われたことであるが、この並外れたエネルギーのうねりのおかげで、作業科学は根を降ろし、1900年代に花咲き始めることになる．それは20世紀初頭に最も影響力をもった作業療法の指導者たちが、作業の哲学的な視点を取り入れたということに見ることが出来る．つまり、作業科学は公式には1989年に南カリフォルニア大学に創設されたが、約90年前に作業療法の専門職を生み出したのと同じ人道的哲学的地盤に根ざしている．作業科学の出現は作業に関する知識を近代化するための強力なステップとなり、21世紀の健康と日常の問題に深い関わりを持っている．作業科学の起源とその後の展開は、その本質において、時宜を得た、しかも、時代を超えたものである．

Convergence of Progressive Social Movements in the Early 1900s 1900年代初頭における革新的な社会運動の集結

作業科学の前進は、今日我々が作業と呼んでいる広い範囲のことに従事することから生まれる健康を促進する効果に気づいた1800年代の道徳療法に遡る(49章参照)．しかし道徳療法が前身にあったというだけでは、何故作業療法がその時に出現したかを説明することは

できない。むしろ、専門職の起源は、20世紀初頭に道徳療法の博愛主義的原則と似通った様々な社会運動が同時代的に起こったことにある(Quiroga, 1995)。これらの運動のもっとも中心となったものの一つはSettlement movement (移民運動) として知られている。

作業療法の重要な初期の指導者であるEleanor Slagleは、Settlement movementの指導者であるJane Addamsのもと、アメリカの女性による革新的な活動の躍動的な中心地、つまりイリノイ州シカゴのHull House Settlementで学んだ(Quiroga, 1995)。Settlement movementは、公民権を奪われた人たち、特に移民たちの貧困、産業化の消耗的影響、文化的孤立を鎮めるために、殆ど女性によって運営され革新的な社会行動主義を採用していた。その提案者たちは、美術、音楽、演劇、著作、工芸などの創造的な活動が、文化的な問題と同じく、個人的、社会的問題に対応する力を持つと信じていた(Addams, 1961)。

それでもSettlement movementが作業療法に与えた影響は、作業の使用だけでなく、他の社会運動、特に精神衛生運動、プラグマティズムの思想、美術工芸運動の提案をひとつにすることに成功したことにある。精神科医で作業療法のパイオニアであるAdolph MeyerならびにSlagleの仕事が作業療法へのsettlement movementの貢献を物語っている。Hull House(訳者注: Settlement Movementの拠点となった建物群)で生活しながら、SlagleはJulia Lathropのもと、Chicago School of Civics and Philanthropy(シカゴ公民慈善学校)で研究した(Quiroga, 1995)。Lathropは精神衛生運動の指導者で精神病患者の治療の革新を模索していた。MeyerもHull Houseとシカゴ大学に関連する革新的で知的な集団と直接的なつながりを持っていた(Breine, 1986)。さらに、Meyer (1922) はLathropと同様に精神衛生運動の代表者だった。彼が、精神病は“大いなる**適応**の問題”であり、作業を通して、さらに仕事、遊び、休憩睡眠の健康な時間的リズムの回復を通して、対処できると書いたとき(1922)の考えは精神衛生運動の見方を反映している。Meyerはさらに教育者John Dewey、社会学者George Herbert Meadeが率いる、プラグマティズム哲学に影響されている。Breines(1986)によると、プラグマティストたちとともに、Meyerはすることdoing、行為acting、経験experienceは存在であり、心と体の統合を表していると主張する(p. 46)。Meyerは、プラグマティスト、精神衛生運動家として、精神病の人たちを代弁して、作業は活力ある生活のスキルを開発するための時間と手段の力強い調整役として利用できることを主張した。

Settlement movement (移民運動) の家は、美術工芸運動の持つ人道的価値を応用するための実験室を提供した(Reed, 1986)。美術工芸運動はイギリスに始まり、産業革命の有する文化的な孤立、非道徳的な影響に対する反発からアメリカ合衆国で広がった(Levine, 1986)。美術工芸運動の主導者たちは、産業革命に反対するとともに、怠慢を(人間)存在の最も破滅的状态と見ていた。この運動の指導者であるJohn Ruskinは、“神は人がこの世界で働かずに生きることを望んではない;私には神は総ての人に働くことに喜びを見出すことを望んでおられると思えてならない”(Levine, 1986, p. 262から引用)。創造的な手を使った仕事は自己感覚と目的感覚を再構成するのを援助できる、とい

う信念は、3人の作業療法の創設者である医師Adolph Meyer, Herbert Hall, William Duntonに強く認められている(Levine, 1986). この3人は美術工芸運動の人道的な価値を、ますます科学的になる医学の世界観と統合しようとした. なるほど、作業療法の始まりは、それ以前にあった、消耗した患者を健康に回復させる唯一の希望(として)・・・
“人気のあった完全なベッド休息と穏やかな食事を実行する”安静治療の後退と時期を同じくする(Quiroga, 1995, p. 74). 安静治療の支持者たちとは反対に、初期の作業療法士は退屈と怠慢は健康に有害であると考え、患者が日常生活で豊かで生産的なメニューを楽しむように懸命に働いた.

作業療法はその起源で、settlement movement、精神衛生運動、プラグマティズム、美術工芸運動に影響を受ける一方、治癒における医学的な側面と精神的な側面のつながりを信じ、結核患者の進歩的治療への運動と連動していった. 20世紀の変わり目には、結核は恐ろしく伝染性の高い病気であった. 結核患者のための革新的な治療が、サナトリウムで起こった. 規則正しい休息とバランスを取りながら、軽い家事動作、屋外作業、レジャー活動、工作仕事などの作業が徐々に従事していくように提供された(Brown, 1922; Kinder, 1922). 医学的治療は含まれず、休憩と活動の日常的パターンが必要な治癒力を作り出すと信じられていたから、患者は自分の活動を監視する責任があった. つまり、自回復における個人の自己決定や積極的参加が健康を回復するための中心的役割を果たすと考えられた. 結核(の治療)運動を越えて、人の自己決定が、治癒における身体的側面と精神的側面の決定的つながりを果たすとも考えられた. 例えば、Herbert HallはEmmanuelismとして知られる、神学に基礎を置く自助運動に関連する多くの考えを支持し、身体、心、魂は解くことのできない相互依存の状態にあると信じた. Hallは、人の自己決定は病気の治癒や予防のための「神聖な計画」の一部、それ故に治癒における精神的役割を強化するものであると考えていた(Quiroga, 1995, p. 106).

さらに、作業療法の始まりは、20世紀初頭付近に起こった女性の改革(運動)と専門職の活動の波という状況の中で考えねばならない(Quiroga, 1995). これらの活動が、伝統的な女性によるボランティア運動を有給の専門職という新時代へ変化させて、作業療法のようになり女性優勢の専門職が起こり、広くアメリカ社会に支持される道を聞いていった. Eleanor Clarke Slagle, Susan Tracy, Susan Cox Johnson, Elizabeth Greene Uphamのような初期のパイオニアたちは、社会的に追放された人の役に立つこと(利他主義)と、女性が社会から期待される従属との間でバランスをとりながら、個人の努力で、作業療法を本格的専門職へと進歩させた. バランスをとりながら、創設期の女性たちは、直接患者たちと働くこの分野の“実行者たち”である女性の革新的ネットワークと密接につながりを持ち、内部から作業療法を構築し、一方、William Dunton, Adolph Meyer, Herbert Hall, George Barton, Thomas Kidnerの男性たちは、部外者(多くは、男性の医師たち)に

作業療法の価値を説得した。彼らは作業療法の科学的な基礎つくりのため理論化にも従事した(Quiroga, 1995)。つまり、作業療法の専門職が形をあらわす間には、当時普及していたジェンダーの信念が観察され、発展し、(明白ではなかったが)抵抗が起こっていた。

Occupational Therapy's Legacy to Occupational Science

作業療法から作業科学への贈り物

確かに、作業は何千年も昔から存在するが、我々の作業理解は21世紀の挑戦に耐えうるようにたくましく進歩する最中であることも真実である。明らかに、1800年代終わりから1900年代初頭に、徐々にしかも集合的に起こった社会運動は、看護、医学、精神医学、ソーシャルワーク、社会学、教育学、哲学、建築、神学の多彩な分野から、作業についての考えを相互交流するように生み出していった(Quiroga, 1995)。この相互交流の贈り物はきわめて道徳的な哲学であり、新生の作業療法専門職はすぐにこれを支持するようになった。最も根本的なことは、哲学が日常生活と健康における作業の中心的役割を認めていることだった。つまり、作業を個別の治療目標を達成するために1日のあちらこちらに組み入れるような多くの治療手段のひとつとは考えていない(Clark & Larson, 1993)。この贈り物の豊かさは学問によって探求されなければならない。作業の概念が今日の作業科学における探求の主要な標的目標となるはずである。さらに、作業科学は作業の形態、機能、意味を「人生、生活の原動力」として明らかにするために学問集団の知識の統合をめざしている。医療的環境における作業の治療的使用を超越している。作業科学は、日常生活の中心的現象としての作業についての知識を生み出し組織化することによって、21世紀には劇的に拡大し複雑さを避けられない作業療法実践の要求に応える援助ができるだろう。作業が健康にとって中心的存在であること(作業の中心性)を明らかにすることは、一般の人々に対しても役立つだろう。つまり、作業療法が適切に十分に価値を持つかどうかの重要な第一歩になるだろう。

作業療法が取り入れた道徳哲学は、作業の中心性に加えて、個々の人間がどんなに貧しくても、社会的に低く評価されていても、障害があっても、その人の本来的価値を認めてきた。初期の実践家達は患者の尊厳や可能性を尊重するときこの哲学を応用し、患者が個人的に意味のある、あるいは社会的に価値のある活動に参加するのを援助していた。今日の作業科学は、その結果社会や文化における作業の機能とともに、作業の主観的な経験を強調している。作業科学は、学問を維持していくための多彩な活動がもはやジェンダーに託されることのない次の世代をも象徴している。このように、男女の活動を、男性が“考え”、女性が“行動する”と、分離して物語ることはなくなるだろう。21世紀に作業科学が花開いたら、医療が男性の独占職種であったことと関連して、作業療法が伝統的に持っていた従属的な部分が過去のことになるだろう。作業科学が成功すれば、作業療法は他の学問からの借り物の知識に基礎を置くのではなく、少なくとも説得力を持った作業の理解に統合していけるような独自の学問分野を持つようになると言えるだろう。

▼作業の形態、機能、意味の最近の研究

作業の形態

作業科学者は、作業の形態を研究するときに直接観察可能な作業の側面に焦点をあてる。我々は、Nelson (1988)が作業形態、作業パフォーマンスと呼んだものについて、このように区別することはある目的には役立つが、実際には作業形態の二つの側面であると信じている。Nelsonの分類では、作業としての何かすることはパフォーマンスと名付けられるが、タスクの必要性も環境的コンテキストも作業形態の側面として分類される。しかし作業形態とパフォーマンスは直接観察可能なので、単一の作業形態という分類に収まることになる。スキーという作業を、必要なタスクと認識可能な運動パターンを伴った作業として認識することには問題がない。しかしスキーヤーがスキー服のかわりに水着を着て、雪山のかわりに湖でこの作業が行われていたら、それを観察するだけで、それがアルペンスキーでなく水上スキーであると区別できる。人がしていること、その環境、時間、空間との関係でどう行っているかを研究することが、作業形態の研究である。従来の時間日記、タイムログ、作業に従事している間のパフォーマンスの観察を行った研究は、作業形態の研究である。しかし最近になって、作業形態に関する複雑な課題や、作業している個人と作業形態が生まれつつあるコンテキストとの複雑な繋がりを明らかにするために、作業科学者やその他の社会科学者によって革新的な質的方法論が利用されてきた (Fig2-1)。

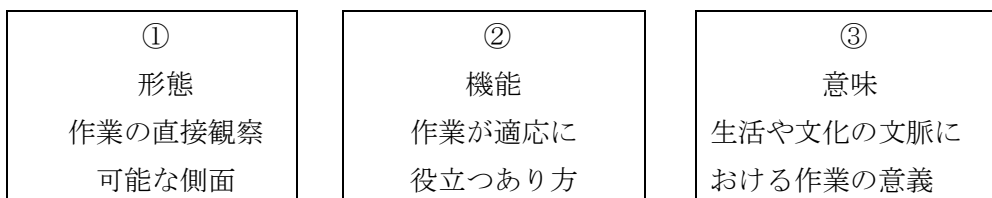


Fig2-1. 作業科学：三つの主要なリサーチの方向

例えば、Pierce(1996a) は、学者がどのようにして生産的でありつづけるかを詳細に記述するために質的インタビュー法を利用した。南カリフォルニア大学の常勤で教える学者十人にインタビューを行い、学者が心理学的な必要に合わせて日々の決まった仕事や活動を構成していることを発見した。例えば、彼らは日々の心理状態が大切な執筆に合うように水泳や散歩を活用していた。学者達は、特定の筆記器具やコンピューターなどのお気に入りの道具を使うことが必要だと報告しているし、あつらえたオフィス空間を頼りにしているようだ。さらに彼らは、特定の時間的リズムに合わせて学者の活動を実行していた。この研究は、生産性に影響するある感情的心理学的側面について言及しているが、この研究はその大部分を、我々が定義した作業形態に焦点をあてている。つまり、直接観察できる側面に焦点を当てている (Fig. 2-2)。

Pierce(1996b)も、小児の対象遊びに関する縦断的研究で作業形態を研究していた。そのリサーチ法は極めて革新的であった。動物行動学者が使っている方法を取り入れた自然な設定におけるビデオ撮影と、家庭におえるインタビューと、コンピューターを使った質的分析を組み合わせていた。異なった年齢の幼児が研究室内の設定でどのように対象と相互に関わるかという従来の方法を繰り返すのではなく、Pierceは、誕生から18カ月の幼児達が自然な家庭状況で対象と関わる様子をビデオテープに納めた。この技術を使って、Pierceは、幼児が家庭の中で自由に近づける空間と対象を与えられたときに、どのように自分の遊びを構成するかを記録することができた。さらに、ビデオテープで記録したときの幼児の発達の準備段階、その他のこどもと家庭の特徴を記録することが可能になった。ビデオ撮影していた期間、幼児のそれぞれの年齢に特有の種類遊びが典型的に現れ、Pierceはこの方法で、各々の設定において、個々の幼児のための遊びがあつらえられていくのを探索することが可能になった(Pierce, 1996b)。Pierceの仕事で主要な発見の一つは、遊びが特定の“形態”を取る程度はそのコンテクストに依存しているということだった。

Pierceの見出したことは、Lave (1988) によるスーパーマーケットの買い物という作業の記録に類似したところが見られる。Lave(1988) は、スーパーマーケットの買い物という一見決まり切った作業でさえ実際には動作する人(買い手)と場所(スーパーマーケット)との間に複雑な弁証法的な関係が含まれていることを発見した。それぞれの買い手はスーパーマーケットの特定の構造的特徴(ディスプレイ、商品の配列、物的空間)と自分の優先順位、買い物リスト、価値、計算力をもとにして自分の買い物法を作り出すようだ。Laveは所見を実践の理論にまとめ、実際に人がどのように作業を行うかは行動する人と設定の接点でおこる複雑な機能であることを示唆した。彼女は、活動とは「設定されたゴールをめざす直線的動作と入れ替え可能である」という目的志向活動の概念を疑問視している(1988, p. 183)。その代わり、彼女は実生活の経験は期待に基づいて構成されていると見ている。彼女は、人々が起こったこと、起こりつつあること、起こるだろうことを期待しながら工夫しながら行動すると主張する(1988, p. 185)。つまり、Laveの仕事は、作業が目的志向活動である、とする考えに疑問を呼び起こす。

作業のオーケストレーションの研究も既に定義した作業の形態の研究である。通常オーケストレーションは、オーケストラのために(音楽を)作ったり、編曲することを意味する。しかし、作業科学では作業のオーケストレーションは、作業の着想、構成、実行、秩序立て、その他の質的側面について用いられてきた(南カリフォルニア大学、1989、p. 1989)。これはタイミング、リズム、調子を含む。最近、Larson(1996) は、重度の障害を持つこどもを育てている貧しいメキシコ系アメリカ人の母親の日常生活のオーケストレ

イシヨンの経過を記述するために質的リサーチ法を実行した。こどもの存在は、世話という大きな負担になるが、長い時間の中ではささやかな安心でもある。Larson (1996)の博士論文は、これらの母親たちが毎日の作業を計画し、調整し、バランスをとり、これらの挑戦をうまくやるための戦略を類別している。

作業は歴史的・文化的に位置づけられている。結果として、古代ギリシャで典型的な作業を構成したものが、部分的には現代の人々が時を過ごしている物に類似している。古代の二輪戦車に乗ることは、ある部分で自動車の運転に似ているが、この2つは似ていると言うより異なることの方が多いだろう。同様に、1755年から1812年にニューイングランドで生涯を送ったMartha Ballardは、家族が着る物を作るために、1日の大半の時間、機織りをし、他の人たちの織物作りの監督に従事していた(Ulrich, 1991)。しかし、作業療法が設立されるまでは、機織りは、任意の(好きでやる)こととして見られていた。家事仕事の一部とは見られていなかった。コンピューター、テクノロジーの進歩によって、人々が時間を過ごす様子に、もう一つの変化を見ることが出来る。作業科学者は、人々の時間の過ごし方の歴史的変化を研究することで、歴史的、文化的な作業形態を調べる。今日の人々の波乗りのようなインターネット、フリーウエーの運転、テレビで時間を過ごすやり方を、19世紀初頭のアメリカ人が見たら、間違いなくびっくりするだろう。

作業の機能

作業科学者が作業の機能について述べる時、作業がどのように適応に役立つかを特に考えている(Wilcock, 1993)。特定の作業が、健康や幸福感を促進するかもしれないし、ある特定の文化を特徴づけるような作業のパターンが町、国、都市、近所、コミュニティーの健康に影響しているかもしれない。ある作業、作業のパターンは健康を促進するが、別のパターンは健康によくないだろう。例えば、ロスアンジェルスタイムス(Nazario, June 23, 1996)は、カリフォルニアに新しく開発されたロスアンジェルス郊外のPalmdaleでは、住民の36.9%は通勤に2-3時間かけている。ここでは妻、児童の虐待、青少年の非行が全国平均をはるかに越えている。さらに、この地域では、ロスアンジェルス郡の他の警察地域より多くの家庭内暴力の逮捕者が出ている。児童虐待率は、カリフォルニアの他の地域より高く、ロスアンジェルス郡の他の地域の2倍にも上る。この記事は日々の通勤が有害な影響を及ぼすことを示唆しているが、この記事に述べられた原因についての公式のリサーチは行われていない。日常の通勤が、妻・子どもの虐待、青少年非行に及ぼす影響についての研究は、特定の作業パターンの否定的な影響についての研究になる可能性がある。最近、作業科学者のPrimeauは、作業としての旅行について評論論文を出版した(1996)。作業科学者が、健康に及ぼす旅行の影響に関する知識を引き出しているので、作業療法実践家は、患者にとっての健康感と機能のための旅行の必要性について、慎重に考えるようになるだろう。

健康、主観的健康感、日常生活上の機能、ストレスの管理、上達と能力の発達、生活の

質と作業についての疑問はすべて、作業とは何をするのか、人間と人間社会にどのように影響するのかに関係している。作業は文化にも影響する。文化は作業を構成し、変化させていくから。例えば、文化人類学者のVictor Turner(1987)は、儀式や社会劇(social drama)の中で、ある作業は一般的な文化基準に挑戦し、文化的変化をもたらすと提唱している。

作業科学者のAnn Wilcock(1993)は、人間が動物学的に作業を必要としているという考えを支持するために、納得のいく理論的主張を述べている。彼女は作業が次の三つの機能を持つと主張する。(1)栄養補給、セルフケア、保護、安全の身体的必要を与える、(2)略奪者や環境に対して優位を獲得するためのスキル、社会構造、テクノロジーの発達、(3)有機体を維持し、繁栄させる個人の能力を訓練、発達させる(p. 20)。Wilcockは、これらの目的にかなう作業に従事しなかったら、人は健康を維持し、繁栄することは出来ないと懸念している。Wilcockの見方は、「健康とは、障害がないということではなく、個人の目的を達成するためのある種のスキルを有しているということとして受けとめられるだろう」と述べたフィンランドの哲学者Porn(1993)に影響を受けたYerxaの見方を支持している(Yerxa, 1994, p. 589)。

最近、Wood(1995)は、Porn(1993)の健康の定義を使って、作業の健康に及ぼす効果について研究している。そのリサーチは、環境が、捕獲されたチンパンジーの作業、適応、健康にどのように影響するかを、質的量的方法を統合した方法で研究している。Wood(1995)は、人とチンパンジーは遺伝子組成の97.6%を共有しているので、両者とも健康であるためには作業が必要だろうと理由づけている。彼女は、作業をするための環境的機会やその欠乏が、実際にチンパンジーが行う一連の作業の複雑さとその頻度に影響されることを見出した。さらに、霊長類の重要な作業において、動作の複雑さや新規さが変化するのが観察された。特に、チンパンジーが作業に挑戦するための動物学的必要性をみたくように生活環境に力を及ぼすための機能として、遊びや対象物の使用における変化が観察された。Woodのリサーチは、住民にとって日常の作業が有効になるようにコントロールする事が可能になるような施設の設置に応用できるだろう。

様々な研究は、趣味、クラブ、宗教活動などの作業に従事することが、老人の健康、認知機能、主観的健康感に関連していると述べている。例えば、Clarkson-SmithとHartley(1990)は、ブリッジクラブに参加する老人は、そうでない老人とは反対に、記憶量や認知過程で高い得点をとることを見出した。同様に、サクセスフル・エイジング(健康老人)の研究では、生産的活動は有給も無給も、身体的・精神的に老人の健康感に相関することを示している(Herzog, House, & Morgan, 1991; Adelman, 1994; Glass, Seeman, Herzog, Kahn, & Berkman, 1995)。総ての年齢層や人生における、特定の作業パターンや選択が、健康促進、健康障害に及ぼす影響を証明するために、原因を明瞭に特定する研究と同様に、上記のような研究が必要である。これらの研究所見は特に、患者の障害・病気を予防し、それに対処することに責任がある作業療法の実践家には有用である。

それらの所見は、コミュニティーの精神衛生、非行予防、薬物乱用、暴力予防の介入に役立つだろう。栄養士がバランスの取れた食事を推薦するように、作業療法士は、健康、健康感を促進するように作業を勧めるためのデータを持つだろう。このリサーチの焦点は、作業療法専門職の創設者が既に述べてきたことである。

作業の意味

人々は作業が生活のコンテキスト（文脈）の中で意味を持つときに大切だと見る (Trombly, 1995)。Trombly(1995)は、「意味のある作業だけが人の生活の宝庫に残る。」と、指摘している (p. 963)。さらに、作業とその意味がいかにパフォーマンスに影響するか、実際の日常の活動で、人は何をすることを選択するかを研究するのは、作業科学者にとって必須である。作業科学者は、作業がいかに文化の中で、象徴的に構成されているかを研究すべきである。個人が自分の作業を意味付けようとするとき、個人的解釈には個人が吸収する文化的意味が含まれないわけにいかない (Bruner, 1990)。White(1996)は、Miles Davisの自伝研究において、単一の作業であるジャズ演奏に全面的に没頭することによって、どのように人生の軌跡が進んでいくかの理解を示した。しかし、アフリカンアメリカンについての一般の文化的な物語が、いかにMiles Davisの聴衆、音楽、批評家、レコード会社の扱い方に影響しているかも示している。別な言い方をすれば、Davisは文化的な神話と物語を基礎に自分の経験に意味を割り当てていた。作業は文化的価値が認められるための最も強力な乗り物のひとつであり、その力は過小評価されるべきではない。しばしば、作業は軽い陽気なことに見られるが、実は、そんな象徴的な意味によって通常のこととはつくれる。ベビーシャワーに行くという作業を考えてみよう。ベビーシャワーは生まれてくる赤ちゃんを祝福するチャンスとして理解されている。妊娠の最後の月にある女性を象徴的に、具体的に支える時である。祝福の時が出産数週間前の母親の精神を後押しするかもしれないし、母親を恐れさせる催しになるかもしれない。このように、催しごとは、母親に出産の成功を「励ます」ことで、象徴的に文化の役に立つ。しかし、別なレベルでは、ベビーシャワーはヘテロセクシャルを巧妙に承認し、その代わりに、ヘテロセクシャルではない人々を縁に追いやってしまうと解釈されるかもしれない。作業科学者のJeanne Jackson(1995)のレズビアン作業療法士とレズビアンの障害をもった女性の研究では、彼女たちが、文化における作業の意味が、しばしば、当然のこととして、ヘテロセクシャルに特権をあたえるための強力な乗り物になると解釈することを示している。作業が社会的構造を強化するもう一つの例には、DeVault(1991)がある。家族に食べさせることが、相互交流する深い結びつきの単位に、家族を構成するためにいかに必要であるかを示している。最後に、Age of Innocenceで、Edith Wharton (1920/1968)は豪華なディナーが、19世紀のニューヨーク社会において、どのように共謀してひとりの伯爵夫人に不倫の疑いをかけ、ヨーロッパに帰してしまうという場になるかを描いている。これらの例は、作業が軽い無害な物にみえても、実は表面をめくると、文化的規範を守るための

意味に埋もれながら、家族のような社会構造を構成するのに役立っていると言うことになるかもしれない。

作業は、個人が感情を表現できるということでも個人にとって意味のあるものである。文化人類学者のRenato Rosaldo(1993, p.91)は、John Lennonの「人生はあんたが計画してるのとは違うことがおこるものさ」を引用している。Rosaldoはこれでしばしば感情が、認知より私たちを行動につき動かすことを示している。Rosaldoは、彼のフィールドであるマニラでIllongotに何故首狩りをするか聞いている。Rosaldoに「悲しさから来る怒りのためだ」とIllongotは応えた(Rosaldo, p.1)。フィールドワーク中の妻の突然の死のあとに初めて、Rosaldoは「Culture and Truth」を書くようにつき動かされるのを感じた。この本は、悲しみに動機づけられている。Rosaldoにとってその経験は、感情がしばしば日常の行動を駆り立てることを示している。悲しみは、葬式という公式な文化的儀式に留まらず、むしろ日常の作業を通して表現され続けるだろう。作業科学者は作業の意味を研究し続ける中で、作業と感情のつながりを創造的に理解したいものである。次に、作業療法の実践家はこの知識を引用して、もっと上手に患者の感情に働きかけ、患者がもっと効果的に作業に従事するように励すだろう。

最後に作業科学者は、作業の意味を研究するとき、どのように人の自己感覚sense of selfが日常の経験の中から表れてくるか、そして、意味ある人生の物語と関連してくるか、に興味を持つ。人は作業のコンテクストの中で、アイデンティティーを築く。彫刻家のJ. Seward Johnsonは、作業をしている人の等身大の静止した超現実的なブロンズ彫刻を制作するが、彼は次のように述べている。作業科学とその治療的応用で、我々は自分がすること、我々が誰なのかを知る(Johnson, 1996, p.25)(Fig.2-3)。例えば、あるティーンエイジャーはカントリークラブで長い時間テニスをして過ごしなが、運動選手、一生懸命、活動的、よくやっているという自己感覚sense of selfを作り上げるだろう。

ここから、実際にこの作業がどのようにして彼女の人生の物語と調和していくのだろう。彼女はオリンピックのテニス選手になったのか、コートで怪我をしてリハビリテーションが必要になったのか、それともあっさり気づいて試合をあきらめたのか?人は物語作りと関連させて自分の作業を意味付け始めると、物語作りのプロセスに没頭する。

Polkinghorne(1988)は、次のように示唆する;

我々は物語作りを使って、個人のパーソナリティーと自己概念に到達し、我々の存在をひとつの進行し発展していく物語の表現として理解することで、ひとつに作り上げていく。我々は自分の話の途中にいて、物語の終わりは知らない;我々は新しい出来事が我々の人生に追加されるたびに、筋書きを作り直さなければならない(p.150)。

Clark(1993)とPrice-Lackey& Cashman(1996)が出版したライフヒストリーによって、作業に従事することと、展開するライフストーリーの意味の深い解釈の帰納的關係が、破滅

的な事故における二人の生存者にとって、どのようにして治療的になったかを示している。これらの二つのライフストーリーは、幼児期からの作業的自己の出現、外傷による障害後の新しい自己の構築、そして治療のプロセスと回復における意味のある作業の中心性を示している。

結論

美術工芸運動、フェミニズム、精神衛生運動、プラグマティズムに影響されて、作業療法の設定者達は、作業に従事することは健康を促進するという強い信念を持った。今日、作業科学者は作業の形態、機能、意味の組織的な研究をすすめている。作業科学は治療に応用可能な本質的な知識の基盤を提供することによって、作業療法に栄養を与えることを約束している。今日の管理型ケアでは、専門職は専門化した知識と技術をもつことを実証しなければならない。作業科学は、実践家が一般によりよく貢献できるための科学的に確認された基盤を提供することを約束する。Eliot Friedson(1994)は雄弁に語っている。

「専門職はある特定の知識、技術体系に従事し、、、つまり、その知識を保存し、洗練し、練り上げるように従事する、、、、、、良い仕事をするために」(p. 210)。作業療法士と作業療法助手は、有効な実践家であるために、今後ますます作業科学で生まれた知識を活用するだろう。

(翻訳：小田原悦子)